

## つる 鶴

つるは、ツル目ツル科に分類される鳥の総称です。鶴は世界の広い範囲に分布していますが、その仲間は世界に15種類しかいません。8000メートルもの高さのヒマラヤ山脈の上空を渡るアネハヅルのような渡鳥がいる一方、北海道に生息するタンチョウヅルのように季節を問わず同じ場所で生活する留鳥もいます。

日本の国鳥は雉であるものの、日本を象徴する鳥として世界から認識されているのは鶴のほうではないでしょうか。とりわけタンチョウヅルは日本で唯一繁殖することができる鶴で、日本人にとって馴染みの深い存在だと言えます。昔話の「鶴の恩返し」に登場したり、折り鶴の原型になったり、1984年発行の千円札の裏のデザインであったりすることがそれを物語っているでしょう。日本航空の飛行機の垂直尾翼には、タンチョウと日の丸を表す赤い鶴のマークが採用されているのも、鶴の知名度の向上に一役買っているに違いありません。「タンチョウ」の和名となる「丹頂」は「赤いてっぺん」を意味し、その頭頂部が赤くなっている見た目に由来しています。アクセントカラーになっているその赤い部分は実は羽毛の色ではなく、皮膚が剥き出しになっているからです。タンチョウは、基本的に全身が白い羽で覆われていますが、目元から喉にかけての部分と首は黒くなっています。また、胴体の後ろ端が黒く見えるのは、翼の一部である長くて黒い風切羽があるからです。細くて華奢な足の黒色や長い嘴の黄褐色など、その絶妙な配色がタンチョウの美しさを際立たせています。

日本でのタンチョウの生息エリアは北海道東部のみとなっており、その中で最も有名なのは釧路湿原です。タンチョウの食性は雑食で、昆虫や哺乳類など栄養価の高い肉類が必須となる一方、葉っぱ類や果実も好んで食べます。多くの野生の動物と同じく、タンチョウは春先の3月から5月にかけて繁殖期を迎えます。つがいの相手が決まると、その相手を生涯の伴侶としてとても大切に扱う姿は仲睦まじい限り

です。タンチョウは、<sup>しゅっさん</sup> 出産のために<sup>しっちたい</sup> 湿地帯の中の<sup>じめん</sup> 地面が<sup>む</sup> 剥き出しになっている部分<sup>ぶぶん</sup> に<sup>か</sup> 枯れ草などを<sup>くさ</sup> 集めて<sup>あつ</sup> 巣をつく<sup>す</sup> 作ります。一度の出産で<sup>いちど</sup> 2個の<sup>しゅっさん</sup> 卵を<sup>にこ</sup> 産むのがほとんどで<sup>たまご</sup> すが、2個とも<sup>ひな</sup> 雛になるまで<sup>ぶじ</sup> 無事に<sup>そだ</sup> 育つ<sup>かくりつ</sup> 確率は<sup>ていど</sup> 10%程度しかなく、<sup>きわ</sup> 極めて<sup>ひく</sup> 低いで<sup>たまご</sup> す。卵を<sup>あたた</sup> 温めるのは<sup>こうたい</sup> オスと<sup>おこな</sup> メスが<sup>ひな</sup> 交代で<sup>かえ</sup> 行い、<sup>う</sup> 卵は<sup>う</sup> 30日間ほどで<sup>う</sup> 雛に<sup>う</sup> 孵ります。産<sup>ひな</sup> まれた<sup>ひな</sup> たての<sup>こども</sup> 雛は、<sup>おも</sup> タンチョウの<sup>ほど</sup> 子供とは<sup>あわ</sup> 思えない程、<sup>ちやいろ</sup> 淡い茶色の<sup>うもう</sup> 羽毛で<sup>おお</sup> 覆われ、<sup>みじか</sup> 足<sup>す</sup> も<sup>ころ</sup> 短いですが、<sup>かぞく</sup> 3日を<sup>す</sup> 過ぎる<sup>はな</sup> 頃から<sup>せいご</sup> 家族で<sup>せいご</sup> 巣から<sup>せいご</sup> 離れる<sup>せいご</sup> ようになります。生後<sup>こ</sup> 100日を<sup>ころ</sup> 超える<sup>からだ</sup> 頃には、<sup>おや</sup> 体が<sup>か</sup> 親と<sup>せいちょう</sup> ほぼ<sup>あきごろ</sup> 変わらない<sup>おや</sup> 大きさに<sup>おや</sup> まで<sup>おや</sup> 成長し、<sup>おや</sup> 秋頃には<sup>おや</sup> 親<sup>おや</sup> と<sup>おや</sup> 一緒に<sup>おや</sup> 空を<sup>おや</sup> 飛ぶ<sup>おや</sup> 練習を<sup>おや</sup> 始めます。そして、<sup>おや</sup> 次の<sup>おや</sup> 春が<sup>おや</sup> 来ると、<sup>おや</sup> いよいよ<sup>おや</sup> 親<sup>おや</sup> 離れを<sup>おや</sup> し、<sup>おや</sup> 巣<sup>おや</sup> 立って<sup>おや</sup> いきます。

タンチョウは、<sup>かんきょう</sup> 環境<sup>はい</sup> 破壊や、<sup>かい</sup> 開発<sup>せいそく</sup> による<sup>げんしょう</sup> 生息<sup>おせん</sup> エリアの<sup>てんてき</sup> 減少<sup>てんてき</sup> や<sup>てんてき</sup> 汚染、<sup>てんてき</sup> そして<sup>てんてき</sup> 天敵<sup>てんてき</sup> や<sup>らんかく</sup> 乱獲<sup>らんかく</sup> などによって、<sup>いちじき</sup> 一時期、<sup>ぜつめつすんぜん</sup> 絶滅<sup>お</sup> 寸前<sup>こ</sup> まで<sup>しょうわ</sup> 追い込まれて<sup>しょうわ</sup> いました。昭和67年に<sup>とくべつてんねんきねんぶつ</sup> 「特別<sup>してい</sup> 天然<sup>いこう</sup> 記念物」<sup>かんきょうしょう</sup> に<sup>みんかん</sup> 指定<sup>だんたい</sup> されて<sup>けいぞく</sup> 以降、<sup>ほ</sup> 環境<sup>ほ</sup> 省<sup>ほ</sup> や<sup>ほ</sup> 民間<sup>ほ</sup> の<sup>ほ</sup> 団体<sup>ほ</sup> による<sup>ほ</sup> 継続<sup>ほ</sup> した<sup>ほ</sup> 保護<sup>ほ</sup> 活<sup>ほ</sup> 動<sup>ほ</sup> が<sup>ほ</sup> 実<sup>ほ</sup> を<sup>ほ</sup> 結び、<sup>ほ</sup> その<sup>ほ</sup> 数<sup>ほ</sup> は<sup>ほ</sup> 現在<sup>ほ</sup> の<sup>ほ</sup> 1,500羽<sup>ほ</sup> 近く<sup>ほ</sup> まで<sup>ほ</sup> 増えて<sup>ほ</sup> います。タンチョウが<sup>にんげん</sup> 人間<sup>にんげん</sup> と<sup>にんげん</sup> 共に<sup>にんげん</sup> 長く<sup>にんげん</sup> 共存<sup>にんげん</sup> していく<sup>にんげん</sup> には、<sup>にんげん</sup> 今後<sup>にんげん</sup> も<sup>にんげん</sup> 環境<sup>にんげん</sup> を<sup>にんげん</sup> 守る<sup>にんげん</sup> 小さな<sup>にんげん</sup> 努力<sup>にんげん</sup> を<sup>にんげん</sup> 惜<sup>にんげん</sup> しまない<sup>にんげん</sup> 姿勢<sup>にんげん</sup> が<sup>にんげん</sup> 求<sup>にんげん</sup> め<sup>にんげん</sup> られる<sup>にんげん</sup> でしょう。